

## 宝くじが人気の中国、背景には経済回復への期待の弱さか

「夢を買うもの」として  
一般化している中国の宝くじ

「宝くじに当たったら、何をしたいですか」

この話題は筆者の勤務校の日本語会話の授業やスピーチ大会の「鉄板ネタ」だ。「世界一周旅行をしたい」「外国へ勉強に行ってみ聞を広げたい」と答える若者が多いが、一方で「家を買って、自分の親と暮らしたい」という親孝行な学生もいる。この話題が会話の授業の「鉄板ネタ」になるのは、宝くじが「夢を買う」という性格があるからだ。

中国にも「彩票」といわれる宝くじがあるが、日本のような「サマージャンボ」や「年末ジャンボ」のようなものでなく、いくつかの数字の組み合わせを当てる「ロトくじ」のようなものが多い。また、その場で当たりがわかる「インスタントくじ」もある。

中国の「彩票」は改革開放後に本格的に整備された。1981年に中国農業銀行と中国人民銀行がそれぞれ5元、10元の「定期懸賞付き預金証明書」というものが発行された。これが「彩票」の前身とされている。1986年12月に国务院の会議で民政部の「社会福祉懸賞付き募金活動の実施に関する報告」が議論され、翌年に社会福祉事業の資金を確保するための「中国社会福祉懸賞付き募金券」が発行された。これが「彩票」の始まりである。この時期、スポーツ振興資金を確保するための「体育彩票」も発行された。改革開放がさらに進んだ90年代に、「彩票」は現在の「福利（福祉）彩票」、「体育（スポーツ）彩票」という形になって、人々に馴染みの深い「娯楽」になった。

筆者は2008年から2011年の3年ほど、「双色球」という「彩票」をよく買っていた。それは、6つの赤い球の番号（1～33）と1つの青い球（1～16）の番号を当てるというもので、2003年から発売されている。くじは1つ2円で、賞金の最高額は800万元といわれている。

くじは街の販売所やスーパーの一角で購入できる。販売所には過去の当選番号が貼り出しており、それを丹念に見、分析した上で数字の組み合わせを決める人、「彩票」をテーマにした新聞を参考にしながら組み合わせを決める人といった、「ガチ」で勝ちにしているような人もいる。筆者は「当たったらいいね」くらいにしか思っていなかったため、過去の数字を見て、自分で組み合わせを決めるようなことをせず、機械で組み合わせを選んでもらっていた。そのためか、この3年で残念ながら高額当選はなく、当たってもせいぜい5元だった。

販売所には「彩票」を買うのを趣味にしているような定年退職者と思しき人たちが、周りの人とおしゃべりしながら、数字の組み合わせを決めていた。彼らにとってはコミュニケーションの手段の1つでもあるのかもしれない。

「夢を買う」という娯楽的な性格を持つ「彩票」だが、最近は売れ行きがよくなっているようだ。

## 不況に強い宝くじ の売れ行き好調

中国の経済メディア「財経」は12日、今年に入ってから、「彩票」消費が好調をキープしていることを伝えた。「財経」は財政部のデータを引用し、1月から4月までの全国の宝くじ販売累計は1751・50億元で、前年同期比49・3%増と大きく増加し、5年ぶりに最高を記録したと述べた。

3年に及んだコロナ禍にともなう行動制限で中国の消費も影響を受けた。昨年12月に「動的ゼロコロナ」政策が緩和されてから、消費は徐々に回復してきている。ただ、今年第1四半期は、3月の全人代で掲げられた経済成長率5%の目標に達しておらず、経済は減速気味だ。日本でも伝えられているように、個人消費拡大の大きな担い手となりうる若者の雇用状況も厳しいため、消費はまだ回復の途上といえる。

一方で、消費拡大の環境は整いつつある。コロナ対策緩和によって、旅行へ行きやすくなった。5月の労働節の連休は旅行消費が伸びたといわれる。文化・観光部のデータセンターによると、中国の国内旅行者は前年同期比70・83%増の延べ2・74億人だった。国内観光収入は前年同期比128・90%増の1480・56億元に達した。

筆者のまわりでも旅行に行った中国人もいたが、「混雑が嫌だ」という理由で行かなかった人もいる。この3年で収入が減って、旅行に行けない人も少なくない。そういう人にとっては「彩票」の購入は、格好の「気分転換」だ。

そのなかで、「彩票」は「どんな下押し圧力にも足を引っ張られることのない」、いわゆる「逆風に強い消費財」といえる。「財経」の記事はその現象を「リップスティック効果」の概念を持ち出して説明した。つまりそれは、不況時には、自分をきれいに見せて、お金持ちの男性と結婚する「夢」をつかむため、生活必需品ではない口紅の売れ行きが良くなるというものだ。

## 人々の「夢を買う」行為の裏に あるのは「不確実性」？

自分の力ではどうも稼げない1000万元近くのお金を得るために、「彩票」を購入する行為はまさに「リップスティック効果」を体現している。

中国人民大学経済学院の王雲副教授は「財経」の取材に対し、「行動経済学の角度から分析すると、『彩票』購入行為は一般的に2つの要素の影響を受ける。1つは消費者のリスク選好、2つは、その主観的に見積もった当選確率だ」と述べた。

王副教授はさらに、「近年『彩票』が大きく売れているのは、マクロの経済環境や個人の収入の変化の影響を受け、一部の人のリスク選好レベルに変化が生じた。それは、『相対的リスク回避』から『相対的リスク選好』に移ったことを物語っている。つまり、たとえ当選しなくても、少しばかりお金を払って、『彩票』を買って『運試し』をしたいという人が増えているのだ」とも述べた。

「彩票」はパチンコや競馬などのギャンブルと違ってリスクが小さく、使ってもせいぜい50元くらいで、外れても損をしたという感覚にはならない。ただ、外れればただの紙切れになってしまうため、その意味では「リスク」といえる。筆者は3年間にわたって、毎週20元を支出して「彩票」を購入したが、前述のように最高当選金額は5元だ。20元の投入に対して5元のリターンだから、大損の部類に入る。純粋な経済行為なら、購入をやめることが賢明な選択だが、王副教授の分析のように、「運試し」に重点を置いているため、多少損をしても買い続けるのだ。筆者もよく家族に「買わなければ、賞金を得るチャンスは永遠にこない」と言って、自分の「彩票」購入行為を「正当化」していた。

人々が「彩票」を購入する原因は、以上のようなことがあるが、その最たるものは、経済の先行きがわからないということだろうと筆者は考える。

22日に「微信」上に発表された「中国経済週刊」の記事は、若者も「彩票」購入の主力になりつつあると指摘した。また記事は、「彩票」はストレス解消の方法として若者に受け入れられているようだ。

前述のように、若者の就職は厳しく、職に就いたとしても、自分の思い描いていたような高収入で将来性のある仕事であるとは限らず、国有企業または役所でない限り、経済状況によって就職先が倒産する可能性もあり、自分がどうなるか、将来は不透明だと考える若者は少なくない。

4月28日の中国共産党中央政治局会議は、「経済の持続的好転、内的原動力の持続的強化、社会の持続的期待改善、潜在リスクの持続的解消を一体化して取り組む」と述べた。ここで言及されている「期待」は、中国語では「預期」といわれており、直訳すれば「予想」である。つまり、人々の経済社会の発展に対する見通しと理解できる。

毎年3月に開かれる全人代（全国人民代表大会）の文書でも、国内外の情勢が「不確実性」に満ちていることを指摘している。

「期待」を安定させるために、中国政府は「積極的財政政策」や「消費環境の整備」、「雇用優先」政策を掲げ、需要を拡大させようとしている。中国は発展がアンバランスで、政策効果が現れるには一定の時間が必要だ。中国政府の示した方向性は間違っていないが、本格的回復にはまだ時間が必要だろう。

「彩票」の売れ行きが好調な現象は、人々の「先行きがわからない」不安の一端を体現しているのではないかと筆者は考える。

ただ、消費の面からいうと、「彩票」という娯楽商品の消費が伸びていることは、消費の多様化、活性化にプラスとなる。

「彩票」で「夢を買う」のは精神衛生上いいことだが、買いすぎには注意したい。

(吉田陽介)